

『帝鑑図説』異植字版小考

五十嵐 金三郎

はじめに

- 一、秀頼版『帝鑑図説』とは
- 二、これまでの研究
- 三、小さな疑問大きな課題
- 四、活字版（本）における後印本の意味
- 五、後印本の二つの意味
- 六、異植字版の調査
- 七、挿絵の異版について
- 八、伝本秀頼版『帝鑑図説』の造本過程
- 九、今後の課題（結びにかえて）

はじめに

旧聞のことで恐縮であるが、去る昭和五八年一月から三月にかけて部内研修が行われた。その折筆者は、計らずも「日本の古活字本」について話す機会に恵まれた。活字版と整版の相違、その識別の方法、古活字版の名称、そしてその歴史におよんで出版の意義にいたる、課題としては実に遠大なものであった。勿論筆者のなせる業ではないのであるが、ただ長く部署にいる関係上比較的現物にふれ、若干なりとも眼識を得たという上司（当時中田吉信部長）の思いやりが数少ない機会を与えて下さったのだと、有難くお引き受けしたのであった。

このささやかな研修のなかで、少々大げさにいえばある衝撃的な疑問を抱いたのである。つまり、秀頼版『帝鑑図説』につ

いてのこれまでの説が、その疑問によって微塵に粉砕された思いがどっと噴出したのである。

本稿では、その疑問を素朴に提示し、解決に少しでも近づくことにより、あらためて同書の性質を明らかにしたいという意図と、筆者自身定説にかなしげりになってそのまま当館の貴重書解題を記述してきたことへの悔悟をもこめて、未熟な調査ではあるが、一つの問題提起を試みておこうと思いついたのである。本稿はその調査の報告書である。

一、秀頼版『帝鑑図説』とは

論をすすめるにあたり、先ず秀頼版『帝鑑図説』とはどういう書物なのかを簡単に紹介しておこう。

同書は、明の張居正・呂調陽の撰になるもので、明萬曆一年

(一五七三)陸樹声の序をもつ明版をもとに、慶長十一年(二六〇六)豊臣秀頼が臣下に命じて木活字をもつて刊行したもので、わが国の出版文化史上画期的なものである。

すなわち、活字は精美端正な様式をもち、豊富な挿図は以後の出版物の先駆をなすもので、慶長十三年(二六〇八)刊嚙岷本『伊勢物語』に先だつこと二年、画は豊臣秀吉の近侍狩野山楽が初めて摹写したといわれる。

内容は、堯舜以来の君主の治道について、その善とすべきもの八一章、悪の戒とすべきもの三六事を取り、蒙求にならないその故事を四字に納めて標出し、その説を詳述して事ごとに一丁の表裏の面に図を付し、次いで伝記の本文を記して直解を加えたものである。

二、これまでの研究

この秀頼版『帝鑑図説』について、先ずこれまでの研究の成果についてふれなければならぬ。

その一は、川瀬一馬博士の『^増古活字版之研究』(以下『研究』と略称する)である。同書はわが国古活字版研究の金字塔となすもので、今日古活字版の調査には欠くことのできない座右の書であり、同書に収録されている図録は、今日すでに散佚して行先不明のものも少なからず存在する事情もあって、尚更その価値を高からしめている。『研究』の解説からやや長文にわたるが登載させて頂くことをお許し願いたい。

豊臣秀頼は年少より清原秀賢等を師として、或は之を大阪へ招いて経籍の講義を聞き、(略)或は掬る可き書籍を求めめる等(略)大いに修学につとめ、著しく好学の風があった。開版事業も其の現れの一面に相違ないが、是が動機はまた家康に負ふ所が少くないと思ふ。「秀頼版」とも称す可きものは慶長十一年刊行の帝鑑図説(六巻 六冊 明張居正 呂調陽撰)一部であるが、秀頼の刊行としては最も相応しいものである。其の活字も精美なる様式を有し、且つ豊富な挿畫刻本である事も挿畫刻本発達の極初期に於ける開版として特殊な意義を併せ持つものと言ふ可きである。卷末に左の如き慶長十一年承兌の跋文がある。

(略)

次いで本書に有跋本と無跋本のあることを示し、その伝本をそれぞれ挙げたうえで、無跋本については、

卷末の承兌の跋文二葉のみを欠く伝本は比較的多い。或は、跋文の性質上後に徳川家を憚って取り去つたものでなからうかとも考へられるのである。

と結んでいる。その伝本を左に掲げると、

一、有跋本

内閣文庫蔵本、東洋文庫蔵本、台湾大学蔵本、陽明文庫蔵本(現存せず)、日光海蔵本、安田文庫蔵本(焼失か)、『近畿大学附属図書館蔵本』

二、無跋本

内閣文庫蔵本、国立国会図書館蔵本、東京大学附属図書館蔵

本、『宮内庁書陵部蔵本』、大阪府立図書館蔵本、市立米沢図書館蔵本、東洋文庫蔵本、安田文庫蔵本（焼失か）成賞堂文庫蔵本、蓬左文庫蔵本、陽明文庫蔵本、大東急記念文庫蔵本、国分青崖蔵本、神田喜一郎氏蔵本、東北大学附属図書館蔵本、尊経閣文庫蔵本、福井市立図書館蔵本、長谷川赴夫蔵本（龍門文庫へ）、天理図書館蔵本、大垣市立図書館蔵本、横山重氏蔵本（近畿大学附属図書館へ、同大計二本）、田安家旧蔵本、竹中重門旧蔵本、『大英図書館蔵本』、『京都外国語大学附属図書館蔵本』、『京都府立総合資料館蔵本』（第五冊のみの端本）即ち、有跋本七点、無跋本二七点が上げられる。このうち『でくくった伝本は『研究』未収のものである。

その二は、長沢規矩也博士の同書についての解説である。

帝鑑図説 六卷 明張居正・呂調陽奉勅 慶長一一跋刊
（古活、豊臣秀頼）巻首及挿図ならびに跋文世に秀頼版といわれるもの。末に慶長十一年、承兌の跋があつて刊行の始末を述べているが、後印本には、家康をはばかつて、この跋を除いたために、伝本は後印の無跋本が多い。なお明版のさし絵を覆刻している点にも注目すべきであるが、さし絵に異版（和訳本と同版）があり、版種に再考を要し、森上修氏再調中。

（図解和漢印刷史）

右の二つの代表的解説をもとに、今日諸機関で刊行している同書についての解説をみると、多くは両説に拠つて書かれてゐることは否めない。以下に諸機関の解説を紹介して後述の道案内としよう。

1 大東急記念文庫貴重書解題

慶長十一年秀頼刊行のものであるが、承兌の跋を去つた後印本である。（略）この本の伝本中承兌の跋を存するものとしては、内閣文庫、東洋文庫、陽明文庫の各蔵本等にすぎないが、跋を闕くものは少くなく内閣文庫（略）。

2 米沢善本と解題

いわゆる豊臣秀頼版の承兌の跋を欠くもの、著者が皇太子（後の神宗）の教育のため上代から宋にいたる間の諸帝の善悪の政績を絵入りで説明したものである。首に万曆癸酉（元年）陸樹声叙、隆慶六年進疏があり、帝一人毎に図を出し、正史その他の記事を抽出し、解をつけている。（略）同版本のうち内閣文庫、東洋文庫、陽明文庫の各蔵本は承兌の跋を存するが、無跋本は大東急記念文庫、上野図書館現国立国会図書館、蓬左文庫等にあつて比較的多い（注 陽明文庫本は無跋本のみ）。

3 日光山「天海蔵」主要古書解題

学問を好んだ豊臣秀頼が帝鑑図説を出版したことは、川瀬一馬氏が徳川家康の出版事業に刺激されたものであろうかと推定された。原装、原題簽は、絵入り、慶長十一年釋承兌跋、訓点朱引入り、この跋のない本の伝本は比較的多く、（略）。

4 名古屋市蓬左文庫善本解題図録 第二輯

慶長一一年刊 古活字版（秀頼版）帯図本・無跋本。この書の命名は、唐の太宗（六二六―六四九在任）のことは（古をもつて鑑となす）に基づき、その内容は、帝王の規範となるような、上は堯舜に始まり、下は宋の徽宗に至る天子の事蹟

を集めて図説する。さらに詳しくいえば、天下を統治する君の「法」となすべき善事八十一事と、「戒」とすべき悪事三十六事とが、前者は「聖哲芳規」という大題のもとに正編四冊にまとまり、後者は「狂愚覆轍」という大題のもとに続編二冊にまとまっている。そして、その体裁は、隆慶六年の歲月を記す「進図疏」の文によると、もとは二冊本で、一図と本文と直解とからなっている。本文とはそれぞれの史書からの引文をいい、直解とはいわば解説である。本書は慶長の古活字版で「秀頼版」といわれる豊臣秀頼の刊行書、絵入り活字本としては初期のものである。駿河御讓本「張府内庫図書」印記。参考 慶長年間、朝鮮から伝わった活字印刷が流行し朝廷・諸侯・寺院・民間の有志などが古典の覆刻・開版をきそった。秀頼版もその一種である。江戸城・名古屋城殿舎などの「帝鑑の間」の襖絵は、本書の図に拠るといわれる。

5 天理図書館貴重書目録 和漢書 第一

慶長十一年豊臣秀頼刊行の承兌の跋文を欠くもの。なほ慶長年間刊なるべし。前編四冊後編二冊、各通丁前序七題字二目五本文二百四十四丁、後題字二目三本文九十八後序三丁、前二百十三・二百四十二丁の補写は旧藏者チェンバレンの筆か。

6 成算堂文庫善本解題

慶長中古活字印本、雙辺、九行十九字、豊臣秀頼所刻本の覆刻。原装。原題簽存す朱墨点書入あり。

7 龍門文庫善本書目

慶長十一年刊、秀頼版、無跋本(略)明版を覆刻したもので

前後両集に分れ、前集(四冊)・後集(二冊)とし、各集首に目録並びに題字(前集「聖哲芳規」、後集「狂愚覆轍」共に整版二葉に大書して刻す。)を附し、巻中一話毎に文首に一葉宛の挿画を加へてある。(略)前集(第四冊)末に、「去歳自元和癸亥冬至寛永甲子季春借餘暇朱墨以點之」墨書識語が見える。

8 国立国会図書館貴重書解題

慶長拾壹稔星集丙午春三月 日 豊光老柄承兌の跋文を欠く無跋本、後印本、(略)丁付は、前後集毎に通しでつけられているが、次の各箇処に誤植がある。(略)各冊末に次の墨書識語がある。

下野足利郡學校常住ノ甲州産田邊庄右衛門尉 与寄進ノ慶長十八年癸丑六月三日ノ庠主寒松老人誌焉

為政者の刊行というばかりでなく、絵入本としても代表的な資料とされている。各冊首に「足利学校」の印がある。

9 大英博物館の古活字版(川瀬一馬著)

「青山学院女子短期大学紀要 第二輯」

秀頼版「帝鑑図説」、無跋緑色原表紙に印刷原題簽を有する美本。

10 福井市立図書館和漢古書分類目録

二編(版心) 明張居正・呂調陽奉勅(慶長一一)刊(古活、秀頼版、後修無跋)

11 東洋文庫五十年展目録 一九六七・一〇・二〇一・一一

慶長十一年(一六〇六)刊 古活字版 六卷六冊 豊臣秀頼の

愛読書で、これを後世まで伝えようとして刊行させたものである。勅版や家康の開版にならったのかもしれないが、豊臣氏開版の唯一のものである。

12 大阪府立稀書解題目録 和漢書の部

（略）第一冊首に陸樹声の帝鑑図説総叙（万歴癸酉）、張居正・呂調陽の進図疏、目録があり、第六冊末に玉希烈の後序（万曆元年）がある。上代から宋にいたる諸帝の政治のうち、善の法とすべきもの（八十一項）、悪の戒とすべきもの（三十六項）をとり、その故事を四字の標目として立て、一項ごとに正史その他の記事を解としてつけて、絵入りで説明したものである。

「帝鑑図説」は、慶長十一年、豊臣秀頼によって刊行された（秀頼版）が、さらに承兌の跋文二葉を省いて慶長年中に刊行された（古活字版の研究）。所掲本はその後者に当る。承兌の跋文は末に「右相府秀頼公及見比書、手之口之、寅夕無不披覽也、仍命工于梓、而壽其伝於無窮也」とあり、その性質上、後に徳川氏を憚って取り去つたものという。

絵入りの古活字版として珍重される。同版本は比較的多く、内閣文庫・蓬左文庫・大東急文庫・米沢図書館・天理図書館などに蔵する。整版もいく度か行われ、官版もある。

13 内閣文庫創立百周年記念 内閣文庫貴重書展目録 昭和六十年五月二十八日—六月三日

中国、明代（二四—一七世紀）の史書。神話時代から唐宋に至る間の諸帝王の善悪二種の事績のなから百十七を選び、それを図示し、解説を付したものである。書名は、唐の太宗の「古を

以て鑑と為す」からとられたもの。鑑は、鏡に同じ。掲出書（一）は、豊臣秀頼が徳川家康の出版事業の影響を受けて慶長十一年（一六〇六）に木活字を用いて刊行したもので秀頼版と呼ばれ、漢籍における絵入り本の早期の例の一つである。

巻末の承兌の跋中に「右相府秀頼公及見此書手之口之寅夕無不披覽也仍命工刻于梓而壽其伝於無窮也云云」とある所から秀頼版と呼ばれているものである。なお、豊臣家滅亡後はその名を忌んでこの跋を除くものが多かった（前者を有跋本、後者を無跋本と呼ぶ）。本文庫には、本書を二部蔵するが、慶長十七年（一六二二）林羅山の弟永喜や家康に献じた旨の附箋のある紅葉山文庫本は原装・原題簽の美本ながら無跋本、昌平坂学問所に伝来した他の一本は有跋本である。

三、小さな疑問大きな課題

さて、これまでに各所蔵機関の解説を紹介してきたが、ここでその紹介記事に基づいて本書の特徴点を列記してみよう。

1 この本には慶長十一年の承兌の跋文が付されているもの（有跋本）と、付されていないもの（無跋本）とがあること。

2 有跋本は伝本が数本にすぎないが、無跋本はかなり多いこと。

3 特に長沢博士によれば、無跋本は後印である、ということ。

4 卷末に跋文のないのは、後に徳川家をはばかって取り除いたものと推定されること。

5 この本の版式はどの伝本もほぼ同一形式であること。

6 挿図が豊富でわが国の挿図活字本の先駆をなすものであること。

7 この本は、中国の明版に拠る覆刻（龍門文庫善本書目）、或は豊臣秀頼所刻本の覆刻（成實堂文庫善本解題、この説であることは川瀬博士から人）、又明版のさし絵を覆刻（図解和漢印史）したものであること。

8 この出版は徳川家康の出版事業に刺激をされて開版されたものと推定されること。
などが上げられよう。

ここで筆者が直感的に疑問を挟むきっかけになったのは、無跋本は後印本である、という長沢博士の解説であり、8、この出版は徳川家康の出版事業に刺激をされたということと、4、卷末の跋文のないのは後に徳川家をはばかって取り除いたという奇妙な因果関係である。

そこで先ず「無跋本は後印」という意味を少し吟味してみようと思う。ここでもう一度長沢博士の解説を引用させてもらうこととする。

巻首及挿図ならびに跋文世に秀頼版といわれるもの。末に慶長十一年、承兌の跋があつて刊行の始末を述べているが、後印本には家康をはばかつてこの跋を除いたために、伝本は後印の無跋本が多い。なお、明版のさし絵を覆刻している点に

も注目すべきである。（点線、○印筆者）

さて、ここでの博士の後印本とはどういう意味なのであろうか。同氏の編にかかる『図書学辞典』には次のように解説している。

こういんぼん 後印本 伝存の板木に手を加えることなく、そのままの板木を使って、後に印刷した本。後刷り。後摺とある。そして次いで

のちずり・あとずり 後刷り（一摺） 後印本と同じ。

とある。また川瀬博士の『日本書誌学用語辞典』には、

後印本「後刷（摺）」を見よ。

とあつて

後刷（摺） 後刷（摺）ともいう。既刊の版（版木）を以て後になつて印刷すること、またその本。後刷（摺）本。後印本。と解説している。

ここで両氏とも共通していることは、後印本というとき、それはいわゆる整版本の場合を前提として解説されていることである。然らば活字本の場合に果して後印（或は後印本）という言葉は真に適切であるかどうか。素朴な疑問を抱かざるを得ない。

長沢博士の真意を存命中に確める暇もなく、また博士の元気な頃には筆者も何の疑問をもたずに説に従い、当館の解説を

臆面もなく書いて来た。報顔の至りである。

そこで、この後悔の念を転じて遅蒔きながら、秀頼版『帝鑑図説』の後印本の意味を筆者なりに考察してみようと思ひ立つたのであった。これはまさに小さな疑問を抱いたばかりにとてつもない大きな課題を自ら背負い込むことになってしまったのである。

四、活字版(本)における後印本の意味

まず一般的な意味での活字本についての定義を考えてみよう。前記のように、長沢・川瀬両博士の説を上げる。

かつじばん 活字本 一字ずつ彫刻又は鑄造された文字を組み合わせて版を作り、この組版に墨又はインクを塗って印刷した本。活字印本。活字版。一字版。植字版。植字本。聚珍版。排印本。集字版。活刻。活版。植版。(『図書学辞典』)

活字本 活字印刷の法によって作られた本。活字版。活字印本。活版本。排印本。

活字版 活版。一字版 植字版 聚珍版(シナの用語) 一字ずつ独立して作られた文字を組み合わせて原版を作り印刷する方法。又活字を以って印刷したものをいう。活字には木製・金属製(主として銅製)その他がある。

(日本書誌学用語辞典)

すなわち活字本(版)とは、一単位の文字を組合わせて原版

をつくり、それを印刷方法によって刷った本をいう。その場合、一度に幾頁(丁・葉)分かを組み原版を作り必要部数分を刷り上げる。そして刷上ったらその組原版を解いてその活字を更次の頁(丁・葉)の原版に襲用する。そのくり返しを行って一部の書物を印刷するのである。丁数の多い大部の書物であればある程、その字母の基本数に応じて襲用する回数も左右される。字母数が少なければ襲用回数が多くなり、後半にいくに従い磨滅度が増して刷り上りが良好な状態から遠ざかる。

このように活字版の場合は、一度原版を作って刷り上ったならば、その原版は解体されてしまう場合が多いので、その原版を保存し後になって活用されて刷られるということは殆んどない。活字版の場合はいわゆる整版本の場合にいう意味での後印本はあり得ないといってもよいのである。それがなぜ、長沢博士は『帝鑑図説』の解説に「後印本」という言葉を用いたのであろうか。筆者の存疑はまさにそこにところにあったのである。

五、後印本の二つの意味

博士の説明を善意に解釈すれば、『帝鑑図説』のさし絵部分について説明しようとしたものかも知れない。先に記した同書の解説の末尾を、「さし絵に異版(和訳本と同版)があり版種に再考を要す」と結んでいることをも考慮に入れれば、そう解釈することの方が自然のように受け取れるのである。また、福井市立図書館の『和漢古書分類目録』に用いている「後修」という用い方も、恐らくさし絵部分の異版を考慮しての言葉と理解す

ることが自然のように思われる。

確かに後述するように、さし絵部分の異版はまぎれもなく板木に手が加えられ修訂されて用いられていることは否定できない。筆者の調査でも、例えば有跋本と無跋本の双方を所蔵している内閣文庫本と東洋文庫本の各々の伝本を対校してみても明かに挿絵に異版が認められるのである（但し無跋本が必ずしも修訂とは限らない）。それにも拘わらず筆者はこの長沢博士の「後印の無跋本」という言葉に執ようにこだわりをもちたざるを得なかったのである。それは全く素朴な以下のような疑問からであった。

すなわち、活字版で後印という場合に二つの意味が考えられる。

その一つは、今仮に一点の書物を百部刷るとしよう。その場合、第一部目の刷りと第百部目の刷りとではでき上った書物の印面に自ずと差異が生ずる。第一部目といわずとも早印の場合には活字も磨耗していないので印面の文字が鮮明に刷り上り、後半になるにつれてその逆に活字が徐々に磨滅して鮮明さを欠いてくる。その後者を説明するのに後印とか後刷とかいう言葉を用いる場合もあり得ることである。

もう一つは、活字印刷の方法として先にも述べたように、必要部分の活字を組み合わせ原版を作り、そしてそれが必要部数分を刷り上げればその原版を解体し、次の頁（丁・葉）へ活字を襲用して組み替えていく。この場合に後印という場合、以前に用いた活字を後代になって再活用し、改めて同じ版式の本を再出版する場合である。これはつまり出来上った書物は形式的

には全く初版本とは同一のようであるが、よくみると、同じ活字を用いていながらそれぞれの箇処に用いられている単位活字は字形が異なるのである。すなわち、いわゆる異植字版と称されるものである。

今日活字版の異植字版はかなり多く、川瀬博士の『古活字版之研究』を一寸繰いてみれば容易に知ることが出来る。

筆者は、長沢博士の用いた「無跋本後印」という言葉に、この異植字版の存在を暗示したかのように受けとめたのであった。つまり右の二つの説明のうち後者の意味に解したのであった。そこからこの『帝鑑図説』における異植字版の調査が開始されたのであった。

六、異植字版の調査

一口に異植字版の調査といってもその調査は実は容易なことではない。一部の図書のある一部分を写真で対校してみるだけでは実証することは困難である。この調査のできる可能性は極めて稀れにしかできない。何故ならば所蔵機関の異なる実物と実物をを以て一所に対査を行うことができるということは殆んど不可能に近いからである。

しかし、といつても何らかの方法によって行う試みは可能な限り追求しなければならぬ。その方法を確立することも学問研究の一つの範疇と考えるからである。そこで筆者の行った調査方法を以下に紹介し、その結果について述べてみようと思う。先ず国立国会図書館蔵本（以下国会本と略称）を主軸に据え、

同本に用いられている活字を一つ一つ検討して字形の変形のもの、或は活字を作る時に生じた刀痕の著しいもの、また欠損を生じているもの等々の特徴のある文字を抄出し、それをできるだけ正確に臨書し（これにはかなり書に通じた人でないとむずかしい。今回は元当館非常勤職員富士原美智子さんの協力を得た）、これを母形として他の諸機関の諸本では同一箇処に同一字形の文字を使用しているかどうかを調査した。勿論、全体の文字の磨滅の状態や、刷り具合の状態、紙質などを考慮に入れた上での調査である。しかし、それにしても実物を眼前にしての調査は実にむずかしく、どうしても写真撮影から引伸し印画を作成し、それとの対査ということにならざるを得なかつた諸本も少なくない。今回実物調査を行った諸本は以下の通りである。

有跋本

内閣文庫蔵本、東洋文庫蔵本、近畿大学附属図書館蔵本（第一・五冊欠）

無跋本

内閣文庫蔵本、東洋文庫蔵本、東京大学附属図書館蔵本、市立米沢図書館蔵本、成實堂文庫蔵本、蓬左文庫蔵本、大東急記念文庫蔵本、東北大学附属図書館蔵本、宮内庁書陵部蔵本、尊経閣文庫蔵本、陽明文庫蔵本、京都外国語大学附属図書館蔵本、近畿大学附属図書館蔵本（二本）、英国図書館蔵本、国立国会図書館蔵本。

である。その他以下の諸本については引伸し印画による調査である。

大阪府立中之島図書館蔵本、天理図書館蔵本、福井市立図書館

蔵本、大垣市立図書館蔵本。

なお、伝本全部を調査することには及ばず例えは日光天海蔵本は収蔵庫を新築中で目下資料の整理中の為閲覧に及んでいない。又龍門文庫蔵本も都合により未披見である。

注 この調査については筆者自ら調査に当ったことは勿論であるが、右の機関のうち近畿大学附属図書館蔵本、京都外国語大学附属図書館蔵本については近畿大学附属図書館運用課長の森上修氏に、英国図書館蔵本については関西大学図書館収集整理課課長補佐の仲井徳氏にあらかじめ筆者が作成した調査表に基づいて協力をいただいた。なおこの件については詳しく後述する。

右の調査方法に基づいて調査した結果が末尾の別表の通りである。

一覽表の説明を加えると、横軸に使用文字の母形（国会本の字形）と、文字の使用箇処（冊・丁^{裏表}・行・目）を示し、縦軸に各所蔵機関を有跋本・無跋本に別けて掲げ、国会本の字形と同一と認められるものには○印を、異なる字形を用いているものには×印をもつて示したものである。その結果以下の結論を得ることができた。

(一) 有跋本

A 国会本に対校して母形文字の使用が同一又は比較的近い字形のもの。

内閣文庫（甲）本

B 右の母形文字を部分的に差しかえたもの。

又豈忍殺人以為禱乎若必用人禱寧可我自當之遂齋戒身心剪斷爪髮素車白馬裁損服御身上披著白茅草就如祭祀的犧牲模樣乃出禱於桑林之野以六件事自責說道變不虛生必有感召今天降災異以儆戒我或者是我政令之出不能中節歟或使民無道失其職業歟或所居的官室過於崇高歟或官闈的婦女過於姦盛歟或包苴之賄賂得行其營求歟或造言生事的讒人昌熾而害政歟有一於此則

内閣文庫藏 (有跋本) 第1冊第18丁裏 (5行下1字目「我」に注目)

又豈忍殺久以為禱乎若必用人禱寧可我自當之遂齋戒身心剪斷爪髮素車白馬裁損服御身上披著白茅草就如祭祀的犧牲模樣乃出禱於桑林之野以六件事自責說道變不虛生必有感召今天降災異以儆戒我或者是我政令之出不能中節歟或使民無道失其職業歟或所居的官室過於崇高歟或官闈的婦女過於姦盛歟或包苴之賄賂得行其營求歟或造言生事的讒人昌熾而害政歟有一於此則

東洋文庫藏 (有跋本) 第1冊第18丁裏

東洋文庫(甲)本(凶版参照)、近畿大学附属図書館(甲)本(第一・五冊欠)。

但し、東洋文庫本と近畿大学本とはさしかえの簡処が異なり、刷りの都度に変形文字に気づきさしかえたものと考えられる。例えば

- 第二冊五八丁裏九行四字目「我」東洋文庫本さしかえ。
- 同六二丁表四行四字目「王」近畿大学本さしかえ。
- 同七三丁表五行下九字目「得」近畿大学本さしかえ。
- 同七六丁裏三行下三字目「訪」東洋文庫本・近畿大学本共にさしかえ。
- 同七七丁裏五行九字目「乎」近畿大学本さしかえ。
- 同九一丁裏七行下一字目「我」東洋文庫本さしかえ。
- 同九六丁裏六行下八字目「輕」東洋文庫本さしかえ。

(一) 無跋本

- A、国会本に母形文字が全く同一のもの。
国会図書館本。
- B、部分的に文字のさしかえのあるもの。
内閣文庫(乙)本、市立米沢図書館本、成實堂文庫本、東北大学附属図書館本、天理図書館本。
かなり国会本に近い伝本であるが、第六冊後編六六丁裏一行九字目「西」ほか二三の文字のさしかえが認められる。
- C、A本と同版と認められるが、全体にかなり文字のさしかえがある。

大垣市立図書館本、京都外国語大学附属図書館本、近畿大学附属図書館(乙)本。

但し、三本共さしかえの箇処がそれぞれ異なる。

D、部分的な文字のさしかえ及び部分的に一葉全部異版の挿入のあるもの。

東京大学附属図書館本、東洋文庫(乙)本、大東急記念文庫本、陽明文庫本。

即ち、第一冊二八丁、二九丁、三一丁、三八丁、第二冊五八丁、八五丁の六葉は他の各葉と特に紙質が異り(伝本により多少の相違がある)、厚手の料紙で印刷面も精美さを欠き、あきらかに異版の挿入である。しかし必ずしも後述の異植字版と同一版ではない。例えば第一冊三八丁裏六行上四字目は「焉」が「馬」と植字され、同六行下三字は、異植字版では「馭駕一」とあるが、この系統本では「駕馭一」と植字されて本文に異同がある。これは英国図書館本と同一系のものではないかと推測される(後掲の異植字版の校異表参照)。これらの挿入葉は丁付に異常な肉太の活字が用いられているところにも他と異なるところがある。

なお、大東急記念文庫本は右の各葉のほか、後編二八丁、同二九丁もあるいは異版かと思われる。

E、異植字版

蓬左文庫本、大阪府立図書館本、宮内庁書陵部本、尊経閣文庫本、福井市立図書館本、近畿大学附属図書館(丙)

本(第六冊欠)、英国図書館本、京都府立総合資料館本(後

編第五冊のみの端本)

この八本については完全な組替え本で、いわゆる全くの異植字版である。仮に国会本と対校して同一字形の文字が使用されているにしても、殆んど各葉すべて異植字である。特記すべきことは、この異植字版の中に部分的に早印本の料紙が挿入されていることである。それがまた各所蔵本によつてその挿入箇所が異なるようである。

書陵部本では前編第三冊一二丁、第四冊一九九丁、二二丁の三葉。

尊経閣本では後編第五冊三三丁、四一丁、第六冊八三丁、八六丁の四葉。

近畿大学(丙)本では前編第三冊一一丁、第四冊一九三丁、一九九丁の三葉。

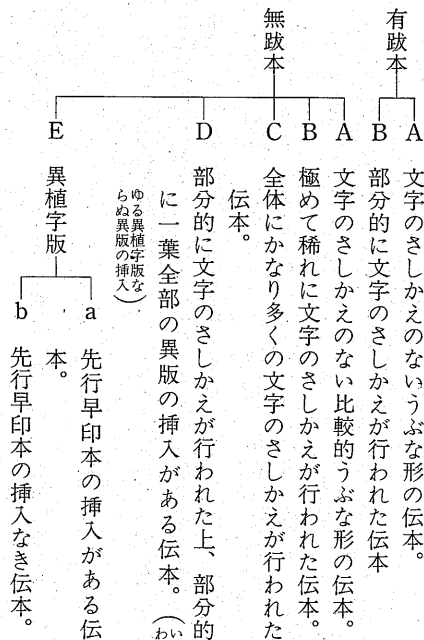
更に、異植字版を証明するために本文の校訂を試みると、以下の異同が認められる。仮に国会本(無跋本)と蓬左文庫本とを対校して表示したのが次表である。

なお、表中「明」とあるのは、明版(書陵部蔵本 刊行不明 一九行 利家旧蔵本)の異同を表示したものである(但し第一冊のみ)。また同じ異植字版でも同一版ではない所もあり、文字のさしかえ修訂が重ねて行われている模様である。そのことをも所蔵本を挙げて表示した。

国会図書館本(無跋 早印本)と蓬左文庫本(無跋 異植字版)との校合

第一冊・丁・行	国会本	蓬左文庫本
叙三丁 表後三行	楊	楊
" 四丁 表後三行	治同道罔	治同道罔
" " 裏四行	于治	于治 書陵部本
" " 裏後三行	訖者	于治 英国図書館本
叙五丁 表五行	事事講求	者訖 英国図書館本
" " " "	内	事事講求 書陵部本
" " " "	講	大阪府立本
" 五丁 裏一行	古	「講」字左横転 書陵部本さしかえ
前本文三丁 表二行	呼	「古」字転倒
" 七丁 表後三行	父母	叫
" 七丁 裏後二行	聖賢	父母
" 七丁 裏後一行	遇見	賢聖
" 二丁 表五行	嗚呼	遇見
" 一四丁 裏一行	裡	嗚呼
" 一六丁 表後一行	傳説	裡
前本文二四丁 裏五行	師	傳説
" 二八丁 表三行	早朝	師
" 三一丁 表四行	候	早朝
" 三三丁 表五行	内	候
" " 八行	初	内
" 三四丁 表一行	初	初
" " 七行	候	初
" 三四丁 裏四行	駕馭	候
" 三八丁 裏六行		駕馭 英国図書館本

以上の調査結果、秀頼版『帝鑑図説』の伝本は以下のグループに分類できるように思う。



七、挿絵の異版について

本書の挿絵は、既述の通り、わが国古活字版挿絵本としてその先駆をなすもので、出版文化史上その意義も甚だ大きいのである。しかし、この挿絵にも前記長沢博士の解説に、さし絵に異版（和訳本と同版）があり、版種に再考を要すとある如く、異版のあることは否めない。筆者の管見に入った諸本のうち和訳本と同版と思われるのは蓬左文庫本の一部に和訳本の補入があるのみである。

周史紀武王召師尚父而問曰：『惡有藏之約行之利萬世可以爲子孫常者乎？』師尚父曰：『在冊書王欲聞之則齋矣。』三日，王端冕下堂南面而立，師尚父曰：『先王之道不北面。』王遂東面立，師尚父西面道書之言曰：『敬勝怠者昌，怠勝敬者亡。義勝欲者從，欲勝義者凶。藏之約行之利可以爲子孫常者，此言之謂也。』王聞之而書于席几，鑑盥盤楯杖帶履觴豆戶牖劍弓矛皆爲銘焉。

解周史上記武王即位之初向老臣師尚父問

周史紀武王召師尚父而問曰：『惡有藏之約行之利萬世可以爲子孫常者乎？』師尚父曰：『在冊書王欲聞之則齋矣。』三日，王端冕下堂南面而立，師尚父曰：『先王之道不北面。』王遂東面立，師尚父西面道書之言曰：『敬勝怠者昌，怠勝敬者亡。義勝欲者從，欲勝義者凶。藏之約行之利可以爲子孫常者，此言之謂也。』王聞之而書于席几，鑑盥盤楯杖帶履觴豆戶牖劍弓矛皆爲銘焉。

解周史上記武王即位之初向老臣師尚父問

国会図書館蔵（無跋本） 第1冊28丁表

東洋文庫蔵（無跋本） 第1冊28丁表

周史紀武王召師尚父而問曰：『惡有藏之約行之利萬世可以爲子孫常者乎？』師尚父曰：『在冊書王欲聞之則齋矣。』三日，王端冕下堂南面而立，師尚父曰：『先王之道不北面。』王遂東面立，師尚父西面道書之言曰：『敬勝怠者昌，怠勝敬者亡。義勝欲者從，欲勝義者凶。藏之約行之利可以爲子孫常者，此言之謂也。』王聞之而書于席几，鑑盥盤楯杖帶履觴豆戶牖劍弓矛皆爲銘焉。

解周史上記武王即位之初向老臣師尚父問

和訳本と古活字本との相違は、題字の部分が和訳本では草体で付訓になっており、古活字本では楷書で無付訓である。相違点一目瞭然である。以下に蓬左文庫本の和訳本挿図混入箇所を示す。

第一冊

前一丁

任賢図治

前十三丁

戒酒防微

前三十三丁

入関約法

第三冊

前一三八丁

兄弟友愛

前一四三丁

聴諫鵠鳥

前一四六丁

啗餅惜福

近大図書館蔵（異植字版） 第1冊28丁表

第四冊

前一八八丁 改容聽講

第五冊

后一丁 遊畋失位

挿図についての異版を、仮に東洋文庫所蔵の有跋本・無跋本
双方を比較して表示すると以下の通りである(注 甲||有跋本 乙
||無跋本 丙||異植字版)

有跋本

無跋本

○前四三丁「止贊受言」挿図丁
付なし

国会本、内閣(甲)本、成實堂
本、近大(乙)本、大垣市立本

○前五二丁「露臺惜費」挿図表
上部に「漢文帝」の文字なし

(明版にはあり)
国会本、内閣(甲)本、内閣
(乙)本、成實堂本、近大(甲)
本、大垣市立本

○前五四丁「遣倭謝相」挿図表

○同上図丁付表下に「前四十三」
とあり

内閣(乙)本、天理本、東大本、
東北大本、蓬左文庫本、書陵
部本、近大(丙)本、大阪府立
本、久原本、尊経閣本

○同上図表上部に「漢文帝」の
文字入る

東北大本、東大本、近大(乙)
本、書陵部本、近大(丙)本、
久原本、尊経閣本

○同上図表右下枠に「由屠嘉」

右下に [] 枠のみ示す

(明版「申屠加」と入る)

国会本、大垣市立本、内閣

(甲)本、内閣(乙)本、成實堂

本

○前六一丁「蒲輪微賢」の挿図
柱「前六十四」と「四」の誤
植

国会本、大垣市立本、内閣

(甲)本、内閣(乙)本、成實堂

本、近大(甲)本、近大(乙)本

○前九八丁「弘文開館」挿図表
右上に「唐太宗」の文字なし

(明版に「唐太宗」の文字入
る)

国会本、内閣(甲)本、内閣

(乙)本、大垣市立本、成實堂

本、近大(甲)本

○前一〇二丁「納蔵賜帛」挿図
丁付「前一二二」を []
枠で囲む

国会本、内閣(甲)本、内閣

(乙)本、大垣市立本、成實堂

の文字入る

近大(甲)本、近大(乙)本、近

大(丙)本、東大本、東北大本

書陵部本、久原本、尊経閣本

○同上図丁付「前六十一」と訂

正

(一)の下部にけずり残しあり)

東北大本、東大本、近大(丙)

本、書陵部本、久原本、尊経

閣本

○同上図丹緑の加筆「唐太宗」
の文字あり

東北大本、東大本、近大(乙)

本、近大(丙)本、書陵部本、

久原本、尊経閣本

○同上図丁付「前一二二」枠な

し

東北大本、東大本、近大(乙)

本、近大(丙)本、書陵部本、

久原本、尊経閣本

本、近大(甲)本

○前一〇八丁「敏賢懷鷓」挿図

丁付「前一百八」を

枠で囲む

国会本、内閣(甲)本、大垣市

立本、成實堂本、近大(甲)本、

近大(乙)本

○前一〇丁「覽圖禁杖」挿図

丁付「前一百十六」と誤刻

国会本、内閣(甲)本、成實堂

本、近大(甲)本、近大(乙)本、

大垣市立本

○前一二四丁「縦囚歸獄」挿図

丁付「前一百十四」を

枠で囲む

国会本、内閣(甲)本、内閣

(乙)本、大垣市立本、近大

(甲)本、近大(乙)本、成實堂

本

○一三三丁「焚錦銷金」挿図

丁付「前二百卅二」とあり

国会本、内閣(甲)本、大垣市

立本、近大(甲)本、近大(乙)

○同上図丁付「前一百八」枠な

し

内閣(乙)本、東北大本、東大

本、近大(丙)本、書陵部本、

久原本、尊経閣本

○同上図丁付「前一百十」と修

訂

内閣(乙)本、東北大本、東大

本、近大(丙)本、書陵部本、

久原本、尊経閣本

○同上図丁付「前一百十四」枠

なし

東北大本、東大本、近大(丙)

本、書陵部本、久原本、尊経

閣本

○同上図丁付「前二百卅二」と

「二」字転倒

内閣(乙)本、東北大本、東大

本、近大(丙)本、書陵部本、

本、成實堂本

○前一六三丁「論字知諫」挿図

裏右上人物の上に「柳公權」

の文字なし(明版にはあり)

国会本、内閣(甲)本、内閣

(乙)本、大垣市立本、成實堂

本、近大(甲)本

○前一六八丁「焚香讀疏」挿図

題字「香讀疏」とあり「焚」

の文字彫り残し

国会本、大垣市立本、内閣

(甲)本、近大(甲)本、成實堂

本

○前二〇六丁「軫念流民」挿図

丁付に「前」の文字なし(明

版に「前」の文字あり)

国会本、内閣(甲)本、内閣

(乙)本、大垣市立本、成實堂

本、近大(甲)本

○前二〇九丁「燭送詞臣」挿図

表中央に「四岳」とあり

(明版に「蘓軾」とあり)

国会本、内閣(甲)本、内閣

久原本、尊経閣本

○同上図裏右上人物の上に

「柳公權」の文字あり

東北大本、東大本、近大(乙)

本、近大(丙)本、書陵部本、

久原本、尊経閣本

○同上図題字「焚香讀疏」と彫

刻

内閣(乙)本、東北大本、東大

本、近大(乙)本、近大(丙)本、

書陵部本、久原本、尊経閣本

○同上図丁付「前」の文字あり

東北大本、東大本、近大(乙)

本、近大(丙)本、書陵部本、

久原本、尊経閣本

久原本、尊経閣本

○同上図表中央に「蘓軾」とあ

り

東北大本、東大本、近大(乙)

本、近大(丙)本、書陵部本、

(乙)本、大垣市立本、近大
(甲)本、成實堂本

○後一丁「遊政失位」挿図表中
央に文字なし(明版に「后羿」
とあり)

国会本、内閣(甲)本、内閣

(乙)本、大垣市立本、東北大
本、東大本、近大(乙)本、近
大(丙)本、成實堂本、書陵部
本、京都府立総合本、久原本、
尊経閣本

○後五丁「革囊射天」挿図裏右
下に「箇老」とあり

国会本、内閣(甲)本、内閣

(乙)本、大垣市立本、東北大
本、東大本、成實堂本、書陵
部本、京都府立総合本、近大
(乙)本、近大(丙)本、久原本、
尊経閣本

○後二七丁「五侯禮權」挿図裏
漢武帝士の五柱に文字なし

(明版に「王逢時・王根・王
立・王商・王譚」の文字あり)

久原本、尊経閣本

○同上図表中央に呉粉を塗り
「后羿」の文字を加筆

○同上図裏右下呉粉を塗り

商武乙
と訂正

○同上図裏漢武帝士の五柱に
「王譚・王商・王立・王根・
王逢時」の文字あり

近大(乙)本、近大(丙)本、東

国会本・内閣(甲)本、内閣
(乙)本、大垣市立本、成實堂
本

○後六二丁「玉樹新聲」挿図柱
下部丁付「六十二」とあり

国会本、大垣市立本、内閣

(甲)本、近大(甲)本、近大
(乙)本、成實堂本
○后七九丁「欽財修費」挿図丁
付「后七十五」と誤植

国会本、内閣(甲)本、大垣市
立本、成實堂本、近大(乙)本、
近大(甲)本は墨書訂正

北大本、東大本、書陵部本、
久原本、尊経閣本

○同上図丁付「後六十二」と修
訂

内閣(乙)本、東北大本、東大
本、書陵部本、久原本、尊経
閣本

○同上図丁付「后七十九」と修
訂

内閣(乙)本、東北大本、東大
本、書陵部本、久原本、尊経
閣本

八、伝本秀頼版『帝鑑図説』の造本過程

ここで、如上の植字一覧をもとに、この秀頼版『帝鑑図説』
の造本過程を類推してみようと思う。

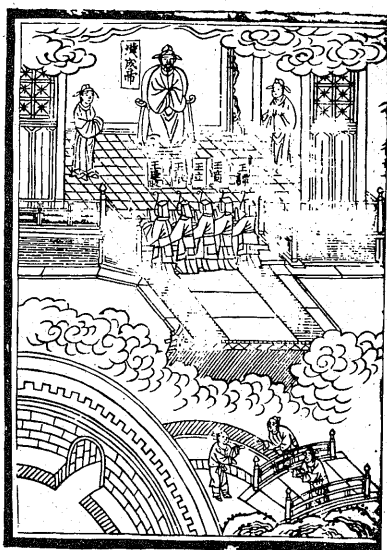
本書についての今日までの有跋本・無跋本の二種の分類は、
形式上において大別すればその通りであろう。しかし、有跋本
の中でも、文字のさしかえない或は少ない生な形のもの、と、
さしかえの明らかな修訂本とあり、又無跋本の中では、例えば、
国会本のように文字のさしかえない生な形のもの、かなり
さしかえが行われたもの、又さしかえの上一葉全部の異版が挿

入されて造本されたものなどがあることを勘案すると、本書の造本過程は、想像以上に、複雑で細かい工程を経ているのではないかと考えられる。

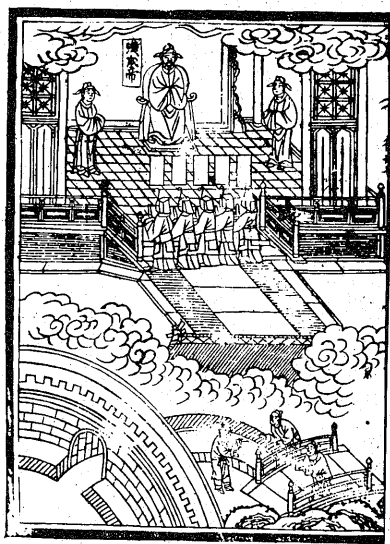
本書の伝本中、最も生な形のもの、有跋本では内閣文庫本、無跋本では国会本であろうと管見に入った伝本中では推察される。従って、有跋本を先行本とし、無跋本を後刷本という断定も必ずしも当を得ていないように思う。

そうみてくると、承兌の跋文は何時の時点で付されたものであろうか。考えるに有跋本の東洋文庫本・近畿大学附属図書館本よりも、無跋本の国会図書館本の方が先行するものと思われるのである。それは国会本には文字のさしかえがみられないからである。もし無跋本の国会本に、もともと跋文が付されていたのを、諸説の通り「徳川家をはばかって後に取り去られたもの」と考えられるならば、国会本の慶長十八年寒松の奥書は、すでに取り去られた後の加筆とみられるから、国会本に限定していうならば、慶長十八年には跋文は取り去られていたとみるべきであらう。

しかし、今日、無跋本の多くを植字の上から調査を行って見たところでは、伝本によってかなりの文字のさしかえがあり、また伝本によっては、文字のさしかえの上一葉全部の異版が挿入され、又全く異植字版まで存在している実態をみると、跋文は、最初に付されたもので、後に徳川家をはばかって取り去られたと断定することは問題はあるに思う。偶々造本の過程で、付加された本とそうでないものと二種が出来たという程のことではなからうか。



同右（無跋本） 前51丁表



東洋文庫蔵（有跋本） 前51丁表

さらに、秀頼版『帝鑑図説』は、造本上から考えて、意外に規模の小さい緻密な作業をくり返して製作されたものと思われる。

それは、伝本をみると文字のさしかえ部分が共通して一致する伝本があるかと思うと、必ずしも一致しない箇所の文字のさしかえが行われているところからも推測される。

それと、組版を作って、何部かを刷って解体し、活字を襲用して他葉の組版を作るその範囲は、別表の異体活字使用の一覽表をみてわかるように、最低では、一葉毎の解体・襲用作業のくり返しとみられる。

例えば、第一冊「疏」第四丁表第八行下三字目の「可」の文字は、すぐ後の第五丁表第四行下一字目に再登場している。これはまさしく、一丁分を刷り、解体し、その活字を襲用した証拠で、実に小規模の細かい作業がくり返されたという印象をうける。

といって、本書全体が一葉ずつ組版され印刷されたというわけではない。幾葉分かをまとめて版を作り刷られた部分も見受けられるからである。

こうした工程を経て出来た本書の伝本は、以下のような時間的経緯を経て製作されていることがうかがえるのである。

すなわち、有跋本A本からB本への修訂、無跋本のA本からB本へ、B本からC本への通修、そして、中には一葉全部が異版の挿入が行われているD本への展開、これは同種の刷葉が部分的に不足し、その補足に異版を徵用したということであろう。ただし、ここで注目しなければならないのは、この場合の異版

葉は、必ずしも後刻の異植字版とは一致しないということである。この実態をどう解釈したら納得できる回答が得られるのか、今日のところ調査不足で明確を欠くが、いずれにしても異版の挿入が事実として存在することは無視できない。次いでいわゆるE、異植字版の登場となるのであるが、この異植字版にも二種ある。すなわち、先行早印本の挿入のあるものとないものである。

このようにみてくると、秀頼版『帝鑑図説』は、非常に複雑な工程を経、また、時間的には案外にあまり長期にわたらない範囲において、特定の場所において一貫して行われたという見方が成り立つように考えられるのである。

○最も生な本の成立

← ○部分的文字のさしかえ

← ○部分的文字のさしかえフラスコ挿入（後刷本の挿入）

← ○異植字版の成立

a 先行早印本の挿入

b 全くの異植字版

という系列で考察すると、本書の一貫した流れの系譜が掌握できるように思う。しかも文字のさしかえが、その都度その都度くり返して行われている緻密な工程は、本書の伝本を調査してみても、実に複雑多岐にわたる構成をもったものだと、調査する側にも錯覚と混乱を起しかねないのが実態である。この実態が

そのまま本書の性格を形成しているように思う。

九、今後の課題（結びにかえて）

以上、秀頼版『帝鑑図説』の異植字版について、主として植字の面からの調査結果を記述して来たが、次のような疑問（課題）は何ら解決していない。しかし、紙幅の都合もあり、今後の課題として列挙し、本稿をひとまず終ろうと思う。

① 秀頼版『帝鑑図説』の成立過程について

本書は、一体誰れによってどこで作製されたのか。その当時の諸職工の分布・生活・支配関係等明かにすべき課題は多い。何より、本書成立の発意は、説かれるように、果して秀頼の好学の現われなのか、他からの強制はなかったのか、関ヶ原の戦後絶対的権力を掌握し、後に神君とまであがめ奉られた徳川家康の圧力の中で、この出版は如何なる意味をもっていたのであろうか。

② 挿図の版種からみた本書の成立事情について

挿図に異版があることは認められるが、しかし、版種によって早印・後印があることも事実である。どの種の図が挿入されているかによって、各伝本の造本上の成立時期を推定することができないか。この挿図と植字との相関関係はどうかなどを調査する必要がある。

③ 諸伝本の伝来系統の探究

各伝本は、当時はたしてどのような人々に配られたのか、或は贈られたのか、そして、本書出版の文化史的、政治史的意義はどうだったのか。

④ 漢籍『帝鑑図説』のわが国への移入と影響について

『帝鑑図説』は一体何時頃どのような経緯を経てわが国に渡来したのか、そしてその影響はどこまで及ぼしたのか。現に、秀頼版のほかに和訳本（二種）、官版まで出版されている。何故このように本書は人気があったのか。その社会的意義を明かにしなければならぬ。

⑤ その他

筆者にとつて、この秀頼版『帝鑑図説』は、単なる書誌学（図書学）上の興味のみならず、歴史学をはじめ、当時の文化・社会・経済・政治の各分野における動向の中に、本書を据えて考察してみたいというのが本心である。多くの出版物の中に在って本書は、それだけの価値を内包しているように思うのである。今回その前段である本書の造本上の正体を明らかにすることで当初の目的は達せられたかと思う。

追記

かつて、長沢規矩也先生は、『図解和漢印刷史』において、さし絵に異版があり、版種に再考を要し、森上修氏（現近畿大学

附属図書館運用課長)が調査中であることを紹介された。

本稿を草するきっかけとなった部内研修(昭和五八年一月)以来、筆者は既述の方法で同書の異植字版の調査を曲りなりにも継続して来た。調査の途中、当館の『貴重書解題』第十三巻(昭和六〇年二月刊)において、ひとまず、同書の異植字版のあることを指摘しておいた。

昭和六〇年夏、内閣文庫和漢図書専門官長沢孝三氏は、筆者を森上氏に紹介され、同氏から早速電話や書信を頂戴した。以後、氏との間に親交を深めるにいたった。本稿を草するにあたり、森上氏のご教示・ご協力がなければ、このような調査は全く不可能であったことを先ず特記しなければならない。

近畿大学は、帝鑑図説の有跋・無跋・異植字版と三種を所蔵されている。すべて同書についての性質は先刻お見通しであった。筆者はただ暗中模索の思いで調査を積み重ねて来あれから三年余になる。そして漸く、ここまでまとめることができたが、森上氏の説の域まで果して到達し得たであろうか。氏は筆者の所に信書を贈られた。そしてすべてを筆者にまかされ、限りないご協力を惜しまずに与えて下さった。同大学架蔵の三種のすべてをコピーに作られ贈って下さった。筆者に代って関西方面の諸伝本を筆者が作成した異体字植字表に基づいて調査され、また英国図書館本については、丁度その頃渡英の機にあった関西大学図書館収集整理課長補佐の仲井徳氏イノベに調査を委嘱して下さった。唯々感謝申し上げる他はない。森上氏らの折角の期待にも拘わらず、果してどれ程の成果を表現し得たであろうか(近畿大学中央図書館報「香散見草」創刊号 一九八五・秋

刊所載「館蔵資料紹介」上において、架蔵の三種の紹介の中で異植字版のあることによれられた上で、筆者も同書について調査中であることも併せ紹介された。もし幾許かの成果があるとすれば、まさに森上氏らの惜しまざるご親切・ご協力の賜もの以外の何ものもあり得ないのである。心から感謝申し上げます。最後に、本稿をまとめるにあたり、伝本を所蔵されている諸図書館・文庫・機関の並々ならぬご好意に対し深謝申し上げます。紙幅の都合によりいちいちの銘記はさし控えさせて頂くことをお許し頂きたい。

補記

本稿では、いわゆる書誌学(図書学)上の用語には余りこだわらず自由に記述することにした。そのために聊か冗長になり、かえって理解しにくい点もあるかと思う。ご理解ご斧正を賜わりたい。

(いがらし・きんぎぶろう 図書部古典籍課)

別表

								冊	簡	所	種別
" 6ウ	" 6才	" 5ウ	" 4才	疏4才	" 3才	" 2ウ	1 叙才	丁	處	藏	
1	4	4	8	3	3	1	7	行			
2	下8	下1	下3	5	7	下9	5	目			
垂	異	可	可	謹	錫	亦	垂	文字			有跋本
○	○	○	○	○	○	○	○	A	内閣(甲)	關洋(甲)	
○	○	○	○	○	○	○	○	B	東近大(甲)	會	
○	○	○	○	○	○	○	○	C	内閣(乙)	大	
○	○	○	○	○	○	○	○	a	国内閣	大	
○	○	○	○	○	○	○	○	b	内閣	大	
○	○	○	○	○	○	○	○	c	東米	洋(乙)	
○	○	○	○	○	○	○	○	d	東洋	寶	
○	○	○	○	○	○	○	○	e	成蓬	左	
○	○	○	○	○	○	○	○	f	陽	明	
○	○	○	○	○	○	○	○	g	久阪	府	
○	○	○	○	○	○	○	○	h	大府	原	
○	○	○	○	○	○	○	○	i	東北	大	
○	○	○	○	○	○	○	○	j	宮書	經	
○	○	○	○	○	○	○	○	k	福井	市	
○	○	○	○	○	○	○	○	l	大垣	市	
○	○	○	○	○	○	○	○	m	京都	外	
○	○	○	○	○	○	○	○	n	近大	(乙)	
○	○	○	○	○	○	○	○	o	"	(丙)	
○	○	○	○	○	○	○	○	p	英	國	
○	○	○	○	○	○	○	○	q	京	都	
○	○	○	○	○	○	○	○	r	府	府	
○	○	○	○	○	○	○	○	s			
○	○	○	○	○	○	○	○	t			
○	○	○	○	○	○	○	○	u			

" 18ウ	" 12ウ	" 12ウ	" 12ウ	" 3才	" 2ウ	前2ウ	目1才	" 6ウ	1 疏6ウ	種別
5	4	2	2	1	6	5	1	5	1	
下9	6	下8	下9	5	8	9	2	下7	下2	
異	我	化	德	歌	亦	可	録	可	視	A
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	B
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	c
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	d
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	e
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	f
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	g
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	h
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	i
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	j
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	k
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	l
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	m
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	n
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	o
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	p
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	q
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	r
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	s
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	t
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	u

1	前18ウ	1	29ウ	29才	29才	28ウ	28才	26ウ	21ウ	1
4	9	2	7	1	7	3	1	1	1	5
下3	下1	下7	下7	下5	1	9	1	1	下2	下1
王	我	玉	化	立	立	王	我	異	我	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	A
○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	B
										C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b
×	×	○	○	×	×	×	○	○	○	c
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	d
×	×	○	○	×	×	×	○	○	○	e
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	f
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	g
×	×	○	○	×	×	×	○	○	○	h
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	i
×	×	○	○	×	×	×	○	○	○	j
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	k
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	l
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	m
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	n
○	×	×	×	○	○	×	○	○	×	o
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	p
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	q
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	r
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	s
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	t
										u

2	前56才	44才	40ウ	38ウ	38才	38才	37才	34才	1	前32才
6	6	2	6	4	3	8	6	7		
下7	3	下9	下3	下7	3	5	下1	下1		
乎		亦	實	駕	安	謀	戰	玉	玉	
○		○	○	○	○	○	○	○	○	A
○		○	○	○	○	○	○	○	○	B
										C
○		○	○	○	○	○	○	○	○	a
○		○	○	○	○	○	○	○	○	b
○		○	○	×	×	×	○	○	○	c
○		○	○	○	○	○	○	○	○	d
○		○	○	×	×	×	○	○	○	e
○		○	○	×	×	×	○	○	○	f
×		○	○	×	×	×	×	×	×	g
○		○	×	×	×	×	×	×	×	h
○		○	○	×	×	×	○	○	○	i
○		○	○	○	○	○	○	○	○	j
○		○	×	×	×	×	×	×	×	k
○		○	×	×	×	×	×	×	×	l
○		○	○	○	○	○	○	○	○	m
○		○	×	×	×	×	×	×	×	n
×		×	○	○	○	○	×	×	×	o
○		○	○	○	○	○	○	○	○	p
○		○	○	○	○	○	○	○	○	q
○		○	×	×	×	×	×	×	×	r
○		○	×	×	×	×	×	×	×	s
○		○	×	×	×	×	×	×	×	t
										u

							2	冊	簡	所	種
" 65ウ	" 65才	" 62才	" 62才	" 62才	" 59才	" 58ウ	前58才	行	處		
3	2	8	7	4	1	9	1	目			
下2	1	5	4	4	下9	4	1				
燕	安	聞	王	道	駕	我	漢		文	字	
○	○	○	○	○	○	○	○	A	内閣(甲)	有	跋本
○	○	○	○	○	○	○	○	B	東洋(甲)		
○	○	○	○	○	○	○	○	C	近国大(甲)		
○	○	○	○	○	○	○	○	a	内閣(乙)		無
○	○	○	○	○	○	○	○	b	東大		
○	○	○	○	○	○	○	○	c	米沢		
○	○	○	○	○	○	○	○	d	東洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	e	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	f	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	g	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	h	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	i	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	j	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	k	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	l	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	m	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	n	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	o	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	p	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	q	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	r	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	s	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	t	成洋(乙)		
○	○	○	○	○	○	○	○	u	成洋(乙)		

									2	種
" 73ウ	" 73ウ	" 73ウ	" 73才	" 72ウ	" 71ウ	" 68ウ	" 68才	" 68才	前65ウ	
5	4	2	5	函	9	2	6	1	4	
下1	8	下9	下9	丁付	下3	4	10	1	7	
立	里	又	得	前	办	政	用	漢	立	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	A
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	B
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	c
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	d
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	e
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	f
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	g
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	h
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	i
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	j
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	k
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	l
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	m
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	n
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	o
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	p
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	q
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	r
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	s
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	t
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	u

"79ウ 3 下7	"78才 凶 題	"77ウ 5 9	"76ウ 9 下1	"76ウ 3 下3	"76才 7 下6	"76才 6 9	"74ウ 2 4	"74才 9 下4	2 前73ウ 9 5	
又	拒	乎	道	訪	加	乎	權	使	我	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	A
○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	B
○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	c
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	d
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	e
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	f
×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	g
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	h
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	i
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	j
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	k
×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	l
×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	m
										n
										o
○	○	×	○	×	○	×	○	○	○	p
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	q
×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	r
										s
										t
										u

"84ウ 9 7	"84ウ 6 下7	"84才 3 4	"82ウ 7 下5	"82ウ 2 2	"82才 4 2	"82才 3 下2	"81ウ 凶 丁付	"79ウ 6 6	2 前79ウ 4 2	
乎	要	數	漢	寧	我	寧	八	奏	萬	
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	A
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	B
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	b
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	c
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	d
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	e
○	×	×	×	○	×	○	○	×	○	f
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	g
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	h
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	i
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	j
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	k
×	×	×	×	○	×	○	○	×	○	l
×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	m
										n
										o
×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	p
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	q
○	×	×	×	○	×	○	○	×	○	r
										s
										t
										u

種別	所	簡	冊	2	前85ウ	89才	89才	89ウ	91才	91才	91ウ	92才	文		
													如	處	
			目	3	6	3	2	9	7	6	8	3	得	字	
				6	6	3	2	9	7	6	8	3	萬	字	
				6	6	3	2	9	7	6	8	3	里	字	
				6	6	3	2	9	7	6	8	3	寧	字	
				6	6	3	2	9	7	6	8	3	諸	字	
				6	6	3	2	9	7	6	8	3	駕	字	
				6	6	3	2	9	7	6	8	3	我	字	
				6	6	3	2	9	7	6	8	3	立	字	
有跋本	(甲)	閣	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
無	(乙)	閣	a	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			b	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
跋	府	版	c	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			d	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	市	井	e	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			f	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	外	大	g	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			h	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	大	英	i	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			j	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	都	國	k	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			l	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	府	都	m	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			n	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	外	大	o	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			p	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	大	英	q	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			r	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	都	國	s	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			t	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	府	都	u	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

種別	所	簡	冊	2	前94才	96ウ	96ウ	96ウ	97才	101ウ	106才	106ウ	文		
													如	處	
			目	4	1	2	6	7	1	2	6	7	晉	字	
				4	1	2	6	7	1	2	6	7	又	字	
				4	1	2	6	7	1	2	6	7	輕	字	
				4	1	2	6	7	1	2	6	7	得	字	
				4	1	2	6	7	1	2	6	7	要	字	
				4	1	2	6	7	1	2	6	7	番	字	
				4	1	2	6	7	1	2	6	7	亦	字	
				4	1	2	6	7	1	2	6	7	器	字	
				4	1	2	6	7	1	2	6	7	得	字	
有跋本	(甲)	閣	A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
無	(乙)	閣	a	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			b	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
跋	府	版	c	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			d	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	市	井	e	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
			f	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	外	大	g	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
			h	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	大	英	i	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
			j	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	都	國	k	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
			l	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	府	都	m	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
			n	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	外	大	o	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
			p	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	大	英	q	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
			r	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	都	國	s	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
			t	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
本	府	都	u	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

# 127才	# 125ウ	# 125才	# 122才	# 117才	# 115ウ	# 115才	# 113才	# 113才	3 前107才	
7	1	8	2	1	7	1	9	2	1	
4	7	下8	下8	8	9	7	6	5	4	
委	視	安	我	德	使	録	我	魏	得	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	A
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	B
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	c
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	d
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	e
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	f
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	g
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	h
										i
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	j
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	k
×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	l
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	m
										n
										o
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	p
○	○	○	×	○	○	×	×	○	×	q
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	r
										s
										t
										u

# 137才	# 137才	# 136ウ	# 136ウ	# 136才	# 136才	# 133ウ	# 133才	# 130ウ	3 前128ウ	
9	8	4	1	3	3	5	6	7	2	
下2	5	下8	下4	下5	1	7	下1	5	下8	
得	委	奏	訪	視	委	實	器	番	徳	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	A
×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	B
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b
○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	c
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	d
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	e
×	×	×	×	×	○	×	○	○	×	f
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	g
										h
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	i
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	j
×	×	×	×	×	○	×	○	○	×	k
×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	l
										m
										n
										o
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	p
×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	q
×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	r
										s
										t
										u

種別		所蔵		冊丁		3		冊丁		簡	
						前137ウ		行目		處	
# 150ウ	# 150ウ	# 150ウ	# 147才	# 144ウ	# 144ウ	# 141ウ	7	1	7	1	7
7	5	2	1	6	3	7	1	1	7	1	7
4	下6	5	下5	下8	1	下7	下6	下6	下6	下6	下6
王我訪嚮聞視舉徳											文字
○	○	○	○	○	○	○	○	○	A	内閣(甲)	有跋本
○	○	○	○	○	○	○	○	○	B	東洋(甲)	
○	×	○	○	○	○	○	○	○	C	近大(甲)	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	a	国内会	
○	○	○	×	○	○	○	○	○	b	内閣(乙)	
○	○	○	×	○	○	○	○	○	c	東大	
○	○	○	×	○	○	○	○	○	d	米沢	
○	○	○	×	○	○	○	○	○	e	東洋(乙)	
○	○	○	×	○	○	○	○	○	f	成費	
×	×	×	×	○	×	○	×	○	g	蓬左	
○	○	○	×	○	○	○	○	○	h	陽明	
○	○	○	×	○	○	○	○	○	i	阪府	
○	○	○	×	○	○	○	○	○	j	久原	
×	×	×	×	×	×	○	×	○	k	東北大	
×	×	×	×	○	×	○	×	○	l	宮書	
									m	尊經	
									n	天理	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	o	福井市	
									p	垣市外	
○	×	×	○	○	×	×	○	○	q	都大(乙)	
×	×	×	×	○	×	○	×	○	r	近大(丙)	
									s	英園	
									t	京府	
									u	都府	

種別		所蔵		冊丁		3		冊丁		簡	
						前150ウ		行目		處	
# 164才	# 164才	# 161ウ	# 161ウ	4	前159ウ	# 157才	# 153ウ	# 151才	3	前150ウ	
6	5	9	8	1	1	1	5	7	9	9	
2	1	3	8	4	4	4	下4	7	9	9	
權權准西安 亦聞化異											
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	A	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	B	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	C	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	c	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	d	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	e	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	f	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	g	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	h	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	i	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	j	
×	×	×	○	×	×	×	○	×	×	k	
×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	l	
										m	
										n	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	o	
										p	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	q	
×	×	×	○	×	×	×	○	×	×	r	
										s	
										t	
										u	

# 174才	# 171ウ	# 171ウ	# 171ウ	# 171才	# 169才	# 166ウ	# 166ウ	# 166才	4 前166才	
3	5	1	1	2	1	3	1	8	7	
下9	下5	下2	下6	下2	7	下2	2	8	2	
西	亦	加	其	聞	聞	麼	麼	讀	録	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	A
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	B
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	c
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	d
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	e
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	f
×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	g
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	h
										i
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	j
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	k
×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	l
×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	m
										n
										o
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	p
										q
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	r
×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	s
										t
										u

# 181才	# 179才	# 178ウ	# 178ウ	# 178才	# 176才	# 176才	# 176才	# 174ウ	4 前174才	
1	1	6	5	7	8	7	1	2	9	
5	下5	下4	下5	10	下5	3	下5	4	5	
寧	安	安	寧	聘	其	器	器	麼	我	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	A
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	B
○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	c
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	d
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	e
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	f
○	×	×	○	×	×	×	×	○	○	g
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	h
										i
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	j
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	k
○	×	×	○	×	×	×	×	○	○	l
○	×	×	○	×	×	×	×	○	○	m
										n
										o
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	p
										q
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	r
○	×	×	○	×	×	×	×	○	○	s
										t
										u

種別	所	館	冊	4	前181才	181才	181才	182才	184才	184才	187才
種別	所	館	丁	前	181	181	182	184	184	187	
			行	181	181	182	184	184	187		
藏			目	10	下8	下7	6	5	10	下4	
文字			貼	寧	我	費	化	讀	德	魏	
有跋本	關(甲)	內閣	A	○	○	○	○	○	○	○	
	洋(甲)	東洋	B	○	○	○	○	○	○	○	
無	大(甲)	近大	C	○	○	○	○	○	○	○	
	會	國會	a	○	○	○	○	○	○	○	
跋	關(乙)	內閣	b	○	○	○	○	○	○	○	
	大	東大	c	○	○	○	○	○	○	○	
本	沢	米沢	d	○	○	○	○	○	○	○	
	洋(乙)	東洋	e	○	○	○	○	○	○	○	
本	贊	成贊	f	○	○	○	○	○	○	○	
	左	蓬左	g	○	○	○	○	○	○	○	
本	明	陽明	h	○	○	○	○	○	○	○	
	阪	大坂	i	○	○	○	○	○	○	○	
本	原	久原	j	○	○	○	○	○	○	○	
	北	東北	k	○	○	○	○	○	○	○	
本	書	宮書	l	○	○	○	○	○	○	○	
	經	尊經	m	○	○	○	○	○	○	○	
本	市	福市	n	○	○	○	○	○	○	○	
	外	大外	o	○	○	○	○	○	○	○	
本	大(乙)	近大	p	○	○	○	○	○	○	○	
	丙	近丙	q	○	○	○	○	○	○	○	
本	國	英國	r	○	○	○	○	○	○	○	
	府	京都府	s	○	○	○	○	○	○	○	
本	都	京都	t	○	○	○	○	○	○	○	
	府	京都府	u	○	○	○	○	○	○	○	

種別	所	館	冊	4	前189才	189才	191才	196才	196才	197才	199才
種別	所	館	丁	前	189	189	191	196	196	197	199
			行	189	189	191	196	196	197	199	
藏			目	3	下2	下2	1	7	10	下7	
文字			亦	講	穡	安	立	德	玉	亦	筆
有跋本	關(甲)	內閣	A	○	○	○	○	○	○	○	○
	洋(甲)	東洋	B	○	○	○	○	○	○	○	○
無	大(甲)	近大	C	○	○	○	○	○	○	○	○
	會	國會	a	○	○	○	○	○	○	○	○
跋	關(乙)	內閣	b	○	○	○	○	○	○	○	○
	大	東大	c	○	○	○	○	○	○	○	○
本	沢	米沢	d	○	○	○	○	○	○	○	○
	洋(乙)	東洋	e	○	○	○	○	○	○	○	○
本	贊	成贊	f	○	○	○	○	○	○	○	○
	左	蓬左	g	○	○	○	○	○	○	○	○
本	明	陽明	h	○	○	○	○	○	○	○	○
	阪	大坂	i	○	○	○	○	○	○	○	○
本	原	久原	j	○	○	○	○	○	○	○	○
	北	東北	k	○	○	○	○	○	○	○	○
本	書	宮書	l	○	○	○	○	○	○	○	○
	經	尊經	m	○	○	○	○	○	○	○	○
本	市	福市	n	○	○	○	○	○	○	○	○
	外	大外	o	○	○	○	○	○	○	○	○
本	大(乙)	近大	p	○	○	○	○	○	○	○	○
	丙	近丙	q	○	○	○	○	○	○	○	○
本	國	英國	r	○	○	○	○	○	○	○	○
	府	京都府	s	○	○	○	○	○	○	○	○
本	都	京都	t	○	○	○	○	○	○	○	○
	府	京都府	u	○	○	○	○	○	○	○	○

# 16ウ	# 16才	# 13ウ	# 13ウ	# 13ウ	# 13才	# 11才	5 後9才	冊 丁 行 目	簡 所 處 蔵	種 別
4 下3	9 4	9 1	4 4	1 下8	1 下5	4 7	5 下4			
可	訪	謹	諸	可	王	王	加	文	字	
○	○	×	○	○	○	○	○	A	内閣(甲)	有跋本
○	○	×	○	○	○	○	○	B	東洋(甲)	
○	○	○	○	○	○	○	○	C	近大(甲)	
○	○	○	○	○	○	○	○	a	内閣(乙)	無跋本
○	○	×	○	○	○	○	○	b	内閣(乙)	
○	○	×	○	○	○	○	○	c	東大	
○	○	×	○	○	○	○	○	d	米沢	
○	○	×	○	○	○	○	○	e	東洋(乙)	
×	×	○	×	×	×	×	○	f	成蓬	
○	○	×	○	○	○	○	○	g	左明	
○	○	×	○	○	○	○	○	h	阪府	
○	○	×	○	○	○	○	○	i	大原	
○	○	×	○	○	○	○	○	j	久北	
×	×	○	×	×	×	×	○	k	東大	
×	×	○	×	×	×	×	×	l	宮書	
								m	尊經	
								n	天理	
○	○	×	○	○	○	○	○	o	福井	
○	○	○	○	○	○	○	○	p	垣市	
○	○	×	○	○	○	○	○	q	大京	
×	×	○	×	×	×	×	○	r	近大(乙)	
×	×	○	×	×	×	×	○	s	"(丙)	
×	×	○	×	×	×	×	○	t	英"國	
								u	京都府	

# 36ウ	# 36才	# 34才	# 34才	# 33才	# 28ウ	# 28才	# 26ウ	# 19ウ	5 後16ウ	種 別
1 下7	9 1	4 下2	3 下6	1 下1	6 下9	6 下4	2 下6	1 6	6 5	
器	諸	喜	燕	燕	王	城	亦	詩	使	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	A
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	B
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	b
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	c
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	d
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	e
○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	f
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	g
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	h
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	i
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	j
○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	k
○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	l
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	m
										n
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	o
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	p
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	q
○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	r
○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	s
欠丁	欠丁	×	×	×	×	×	×	○	○	t
										u

才	才	才	才	才	ウ	ウ	ウ	才	5 後36ウ	
46	46	46	44	42	41	41	39	38	36	
2	2	2	1	4	5	1	6	5	4	
5	2	1	下8	5	1	6	2	下4	下4	
駝	鐘	安	使	安	加	德	使	異	亦	
○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	A
○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	B
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
	○	○	○	○	○	○	×	○	○	b
	○	○	○	○	○	○	×	○	○	c
	○	○	○	○	○	○	×	○	○	d
○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	e
○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	f
	○	×	×	×	○	○	×	×	×	g
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	h
	○	○	○	○	○	○	×	○	○	i
	○	○	○	○	○	○	×	○	○	k
	○	×	×	×	○	○	×	×	×	l
	○	×	×	×	○	○	×	×	×	m
										n
										o
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	p
										q
○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	r
○	○	×	×	×	○	○	×	×	×	s
										t
○	○	×	×	○	○	○	○	×	欠丁	u

ウ	才	ウ	才	才	ウ	ウ	ウ	才	5 後47才	
54	54	51	51	51	49	49	49	47	47	
3	2	3	6	6	8	6	4	3	3	
下9	下10	下8	下5	5	5	下6	下6	下6	下6	
王	華	素	番	卑	亦	華	權	使		
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	A
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	B
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	c
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	d
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	e
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	f
×	○	×	○	○	×	×	×	×	×	g
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	h
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	i
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	j
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	k
×	○	×	○	○	×	×	×	×	×	l
×	○	×	○	○	×	×	×	×	×	m
										n
										o
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	p
										q
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	r
		×	○	○	×	×	×	×	×	s
										t
		×	○	○	×	×	×	×	×	u

" 66ウ	" 66ウ	" 66才	" 66才	" 64ウ	" 63ウ	" 57才	6 後56才	冊 丁 行 目	簡 處 藏	所 別	種 別
9 下4	1 9	7 1	4 下5	1 5	9 下7	3 3	9 4				
亦 西 市 華 乎 諸 安 器										文 字	
"	"	"	写	○	○	○	○	A	内 閣(甲)		有 跋 本
○	"	写	○	○	○	○	○	B	東 洋(甲)		
○	×	×	○	×	○	○	○	C	近 国 大(甲)		無 跋 本
○	○	○	○	○	○	○	○	a	内 閣(乙)		
○	×	○	○	○	○	○	○	b	東 大		
○	×	○	○	○	○	○	○	c	東 米		
○	×	×	○	○	○	○	○	d	東 洋(乙)		
○	×	○	○	○	○	○	○	e	東 洋(乙)		
×	×	×	○	×	×	×	○	f	成 蓬 左		
○	×	○	○	○	○	○	○	g	陽 明 府		
○	×	○	○	○	○	○	○	h	大 阪 府		
○	×	○	○	○	○	○	○	i	久 原 大		
○	×	○	○	○	○	○	○	j	東 北 大		
×	×	×	○	×	×	×	○	k	宮 北 書		
×	×	×	○	×	×	×	○	l	尊 經 理		
								m	天 井		
								n	福 垣 市		
○	×	○	○	○	○	○	○	o	大 京 都		
○	×	○	○	○	○	○	○	p	近 大(乙)		
								q	英 國 函		
								r	京 都 府		
								s	"		
								t	英 國 函		
								u	京 都 府		

" 78ウ	" 78ウ	" 77ウ	" 72ウ	" 72才	" 72才	" 72才	" 69才	" 69才	6 後67才	種 別
1 下2	1 下8	5 8	3 下8	9 下4	9 下9	1 下7	7 6	4 7	9 7	
異 我 麼 麼 寧 安 寧 里 艘 王										
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	A
○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	B
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	b
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	c
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	d
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	e
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	f
×	×	○	○	○	×	○	×	○	×	g
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	h
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	i
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	j
×	×	○	○	○	×	○	×	○	×	k
×	×	○	○	○	×	○	×	○	×	l
										m
										n
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	o
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	p
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	q
										r
										s
										t
										u

ㄨ 91	ㄨ 91	ㄨ 91	ㄨ 91	ㄨ 91	ㄨ 85	ㄨ 85	ㄨ 81	ㄨ 81	6	
2	2	1	1	1	5	5	6	5	後80	才
下5	8	下1	3	下2	9	下7	6	8	6	
加	喜	異	聞	以	諸	器	安	王	使	
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	A
○	○	○	○	○	〃	写	○	○	○	B
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	b
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	c
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	d
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	e
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	f
×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	g
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	h
										i
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	j
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	k
×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	l
×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	m
										n
										o
○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	p
○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	q
										r
										s
										t
										u

ㄨ 97	ㄨ 96	ㄨ 95	ㄨ 95	ㄨ 95	ㄨ 95	ㄨ 95	ㄨ 94	ㄨ 94	6	
8	1	8	8	4	9	2	4	1	後92	才
8	下1	7	5	下5	下4	4	下9	下5	下9	
使	諫	華	器	舉	夾	乎	器	濫	使	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	A
○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	B
○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	C
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	a
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	b
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	c
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	d
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	e
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	f
×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	g
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	h
										i
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	j
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	k
×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	l
×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	m
										n
										o
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	p
×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	q
										r
										s
										t
										u

図書館・文庫一覧

略称	図書館・文庫名
内閣	国立公文書館内閣文庫
東洋	東洋文庫
近大	近畿大学附属図書館
国会	国立国会図書館
東大	東京大学附属図書館
米沢	市立米沢図書館
成篁	お茶の水図書館成篁堂文庫
蓬左	名古屋市蓬左文庫
陽明	陽明文庫
大阪府	大阪府立図書館
久原	久原文庫(大東急記念文庫)
東北大	東北大学附属図書館
宮書	宮内庁書陵部
尊経	尊経閣文庫
天理	天理図書館
福井市	福井市立図書館
大垣	大垣市立図書館
京都外	京都外国語大学附属図書館
英国図	英国図書館
京都府	京都府立総合資料館

冊 丁 行 目	6		簡 所 蔵	種 別
	#1才	後序1才		
	7	4		
	下7	5		
玉以			文字	
○	○	A	内閣(甲)	有 跋 本
○	○	B	東洋(甲)	
○	○	C	近大(甲)	
○	○	a	国会	
○	○	b	内閣(乙)	
○	○	c	東大	
○	○	d	米沢	
○	○	e	東洋(乙)	
○	○	f	成篁	
×	×	g	蓬左	
○	○	h	陽明	無 跋 本
○	○	i	大阪府	
○	○	j	久原	
○	○	k	東北大	
×	×	l	東宮書	
×	×	m	尊経	
		n	天理	
○	○	o	福井市	
		p	大垣市	
		q	京都外	
○	○	r	近大(乙)	
		s	"(丙)	
		t	英国図	
		u	京都府	

#3才	#2ウ	6		種 別
		後序1ウ		
		2	4	
2	下1			
學乎異				
○	○	○	A	有 跋 本
○	○	○	B	
○	×	○	C	
○	○	○	a	
○	○	○	b	
○	○	○	c	
○	○	○	d	
○	○	○	e	
○	○	○	f	
欠丁	×	○	g	
○	○	○	h	
			i	
○	○	○	j	
○	○	○	k	
×	×	○	l	
×	×	○	m	
			n	
			o	
○	○	○	p	
			q	
○	○	○	r	
			s	
			t	
			u	